

北海道胆振東部地震から7年を迎えて ～ 厚真町長メッセージ

平成30年9月6日未明、北海道で初めて震度7を観測した胆振東部地震から、本日で7年が経過しました。この震災で犠牲となられた37名の方々に、心から哀悼の意を表します。最愛のご家族やご親族を失われた皆様の胸中を思うと、いまなお尽きることのない悲しみがこみあげてまいります。

震災直後から捜索活動や復旧業務に尽力された関係機関、全国から駆け付けた多くのボランティア、専門家、そして温かなご支援をお寄せくださった全国の皆様に、心から感謝申し上げます。私たちは「震災に埋もれた悲しいまち」で終わらせない覚悟のもと、復旧・復興の歩みを一步步進めてまいりました。多額の国費が投入され、生活空間と生産基盤の安全確保、宅地耐震化、森林再生など、着実に事業を推進しています。

私たちは復旧と並行して未来への備えを進めています。日本海溝・千島海溝周辺の巨大地震を見据え、関連する防災対策計画を策定し、津波避難施設の整備や個別避難対策など、命を守るための対策を推進しています。

また、復興の先に描く未来像も形になりつつあります。エネルギー地産地消、ZEH仕様の子育て支援住宅、ゼロ・カーボン・ビレッジの形成など、官・民・学連携でカーボン・ニュートラル政策を進め、災害に強く環境に優しいまちづくりを推進しています。エネルギーを自ら賄い災害時も機能するライフラインは、被災地だからこそその夢であり、未来への投資とも考えています。

自然災害が多発する日本にありながら、防災のハード面や減災につながる取り組みへの注目が十分ではない現状を危惧しています。平穏な生活空間に潜むリスクの見える化を図りながら、時代や歴史から学び、減災の知識と備えが当たり前のこととして日常に広がっていくことこそが、私たちのもう一つの願いです。地球のエネルギーを由来とする自然災害は人知を超えて繰り返されることを覚悟し、常に備える必要があります。

改めて、発災の日の出来事に想いを馳せると、夢であってほしいと願った日々や、犠牲になられた方々との時間は止まったままであることに気づかされます。私たちはその後の歩みを大切にしながら、これからも最善を尽くしてまいります。「易きに流されるな、誠実に生きよう。あつま愛と助かった命を大切に。」皆様の声に背中を押されながら、厚真町は「強靱でしなやかなまち」「挑戦を諦めないまち」を掲げ、「誰一人として取り残さない」を合言葉に、未来創生と持続的発展の道を着実に歩んでいます。現在策定中の第5次厚真町総合計画を通じ、100年先も安心して暮らし続けられる厚真町の実現に向け、町民の皆様と一丸となって歩を進めることをお約束します。

結びに、犠牲となられた37名の御霊が永遠に安らかならんことを心よりお

祈り申し上げます。また、ご遺族の皆様のご平安とご健勝、そして本町に関わるすべての皆様のご多幸をお祈り申し上げ、追悼の日のメッセージといたします。

令和7年9月6日

厚真町長 宮 坂 尚 市 朗